

「SDGs×時の蘇生・柿の木プロジェクト」植樹記念クロストーク

2022年5月14日(土) 14:00～15:30 / 東京富士美術館・ミュージアムシアター

樹木医 海老沼正幸 × 現代美術家 宮島達男 × 東京藝術大学学長 日比野克彦

司会：平谷美華子(東京富士美術館学芸員)
主催者挨拶：笹金光夫(東京富士美術館SDGs担当)

司会 ただいまより「SDGs×時の蘇生・柿の木プロジェクト」植樹記念クロストークを開会いたします。初めに、当館SDGs担当の笹金光夫より主催者挨拶がございます。

主催者 1945年8月9日、長崎で被爆したものの、奇跡的に生き残った1本の柿の木。その種から本日のゲストであられる樹木医の海老沼正幸様が、被爆柿の木2世の苗木を育て、長崎を訪れる子供たちに配る活動をしていました。

この活動を知った現代美術家の宮島達男様が発起人となり、1996年より「時の蘇生・柿の木プロジェクト」として柿の木をテーマにしたアート表現を通し、平和の心を育てるアートプロジェクトを世界中に広げてられました。

本日のゲストであられる日比野克彦様も、初期から本プロジェクトに関わってられました。これまでに世界26カ国、320カ所以上の学校や美術館等の公共施設に植樹され、延べ3万人の子供たちに平和の種をまいています。

東京富士美術館では、SDGsに取り組むなかで「時の蘇生・柿の木プロジェクト」に出会いました。「心に平和の種をまきたい」との理念が、SDGsで掲げられている「16：平和と公正をすべての人に」「17：パートナーシップで目標を達成しよう」などに合致し、当館の「アートを通して平和の礎を築きたい」とのビジョンと共鳴するものと考えました。すなわち「アートを通して、世界を覆う不信や暴力、分断を打ち破り、国境や民族、宗教などの差異を超えて、互いの中に等しく美(アート)を見出したい」と。このような経緯で素晴らしいプロジェクトに出会い、参加させていただき、先ほど午前中には大変多くの方にご来場いただき、被爆柿の木2世の植樹式を無事開催することができました。

本日は、樹木医の海老沼正幸様、現代美術家の宮島達男様、そして、2022年春より東京藝術大学学長に就任された日比野克彦様の3人のスペシャルゲストをお招きして「SDGs×時の蘇生・柿の木プロジェクト」植樹記念クロストークを開催させていただきます。当イベントが、皆様にとりまして有意義な時間となりますことを願っております。

これをもちまして、主催者からの挨拶と代えさせていただきます。ありがとうございます。

被爆柿の木の母木の蘇生

司会 それでは初めに、被爆柿の木の母木を何年もかけて蘇生された、まさに生みの親、樹木医の海老沼様よりお話をいただきます。

海老沼 皆さん、こんにちは。長崎から参りました樹木医の海老沼と申します。今日は、よろしくお願いします。

気がついたら、これほど大きなことになってしまっ、本当に驚いています。というのは、今から28年前に、ある人から「うちの木を診てもら

えないかな」と言われて、診に行きました。

そうしたら、木が半分焦げていて、要するに炭になっていたのです。私はそのような姿の木を、初めて見ました。周りは道路だったので「これは、どういうことなのかな。この下でたき火でもしてたのかな」と思ったら、違ったのです。「これは、原爆で焼けた木なんですよ」と近くのおばあさんが言っておりました。

4～5メートルもあった木が、1.5メートルぐらいのところからなくなっていたのですが、それでも奇跡的に光が当たらないところから芽が出てきていたのです。よく生きていました。人間だったら、とつくに死んでいます。

もちろん、長崎では、1発の原子爆弾によって7万数千人の方が一瞬にして亡くなりました。樹木も何もありませんでした。

どのような訳が分かりませんが、私のところには、そのように被爆した樹木の話ばかりが来たのです。どれを見ても、もう、そのような感じでした。全部で17本ぐらいありますが、皆さん、今度、長崎に来て見てください。かわいそうです。涙が出てきます。これからの子供さんには、あのような地獄を見せたくはありません。

最近、ロシアとウクライナの紛争では何やら恐ろしいことを今からやろうとしているようですが、ただ事じゃないですよ。核を使うというような話もちろほらと聞こえております。とんでもない話です。核が使われたら、人間はもう終わりです。生きていられません。

よく考えてください。核を使ったら、そのエネルギーで地球にどれだけの被害を及ぼすかということです。先ほどは温暖化の話も出ておりましたが、温暖化が急速に進みます。地球のオゾン層がはげ落ちていくわけです。そのような大きな規模になっていきます。人類は滅びます。

ここ東京富士美術館から平和の発信をできるように、原爆が二度と使われないように、訴えていってください。長崎が最後の被爆都市であってほしいです。今日はいろいろな思いでここに僕が作った苗を植樹させていただきました。ありがたいことです。ここから2世が3世、4世と羽ばたいていかれることを切に願っています。「そうしたら、早く平和がまた訪れるのかな」と、そのような期待をしながら、このように植樹をしています。

本当に、私は、とにかくそのように戦争のない、原爆を使わせない、皆で平和のキャッチボールをできるように、そんな世の中にしたいと思っています。私が生き続ける限り、一生懸命に柿の苗をまた作って、皆さんが思う平和をこのように一緒に考えながら続けていきたいと思っています。



樹木医の海老沼正幸氏

今日は、宮島先生、日比野先生もいらしておりますので、また一緒に話をしたいと思います。今日は、本当にありがとうございました。

司会 続きまして、世界でご活躍の現代美術家・宮島達男様、2022年春、東京藝術大学学長にご就任されました日比野克彦様のクロストークに移らせていただきます。

「柿の木プロジェクト」の始まり

宮島 宮島です。よろしくお願いいたします。今日は、午前中にこの東京富士美術館の庭に無事、被爆柿の木2世の植樹をしまして、それでクロストークということで日比野さんにも忙しいなか、来ていただきました。今日は、本当にありがとうございました。

日比野 はい、ありがとうございます。

宮島 よろしくお願ひします。

まず私から、「柿の木プロジェクト」がどのような経緯で始まったのかをスライドを交えながら一通りご紹介していきたいと思っています。

先ほど、海老沼先生から紹介があったように、長崎に原子爆弾が落とされて7万数千人の方が一瞬にしてお亡くなりになりました。私もアーティストとして原爆などに対して強い憤りを感じていたものですから、実は、長崎で展覧会があったときにいろいろなことを調べていて、そのリサーチをしたなかで「被爆した柿の木が生き残っていた」というお話を伺いました。先ほど先生が「たき火でもしていたんじゃないか」と言われたように、黒焦げでケロイド状になって生き残っていたのです。そのような柿の木を見て「ああ、悲惨だな」と思いました。

そうすると、ここの柿の木を治療して2世の苗木を作っている先生がいらっしゃるというお話を聞きました。これは、治療している最中の柿の木の絵ですが、その海老沼先生に電話をして事務所を訪ねていきました。

若かりし頃の海老沼先生です。もう27年前の話です。この海老沼先生に「柿の木の2世を見せてください」と言ったら、「おまえは誰だ」と、

げげんそうな顔をされました。「現代アーティストの宮島です」と名乗ると「現代アート？ わしゃ、知らんな」と「けんもほろろ」だったのですが、見せていただきました。

その苗木は、本当に小さくて、20センチぐらいでしたでしょうか。その苗木を見たとき、とてもきれいで、「ああ、これは、素晴らしいな。お母さんが被爆した、そういう宿命を背負っていながらも、なおこんなにもけなげに生き生きと生きている」と、宿命に抗うような、逆らうような生命力のたくましさを感じました。私たちは戦争を知らない世代ですし、被爆のことも本でしか分かりません。でも、同じような宿命を背負っている、そのような共感もちました。先生がこの苗木を修学旅行で来た様々な生徒さんに配っていらっしゃるというお話を伺って、「じゃ、先生、私にもそのお手伝いをさせてください」ということで先生から苗木を分けていただきました。

それで、植樹をするときには子供たちの思い出に刻まれるように何かのアート表現をしてもらおうということになりました。そうすると、訳が分からない子供たちであっても、楽しい表現をした思い出とともにその柿の木のことを記憶してくれるだろうと。そうしたら、大人になって振り返ったときに、それが被爆した柿の木であって「原爆とは恐ろしいものなんだな」と気づいてくれるのではないかと期待しながら、プロジェクトを始めました。1996年のことです。

そうして、第1号の植樹を台東区の柳北小学校でやりました。このスライドにあるのは、その翌年に岩手の広瀬小学校で植樹したときの様子です。

このプロジェクトは宣伝などは一切なくて、ボランティアなプロジェクトでしたので、少しずつ口コミで広がっていったようなところがあります。このように植樹をしたときにアート表現を一緒に行っていただくことで子供たちの記憶に深く残していく、そのようなプロジェクトです。



現代美術家の宮島達男氏



東京藝術大学学長の日比野克彦氏



広瀬小学校での植樹の様子(スライド)

海外に広がる柿の木の植樹

宮島 私も、少しずつ展覧会などでこのプロジェクトの話をしていくにつけて、世界の中でもぼつりぼつりと植樹をしていただくことができるようになりました。これは、1998年にスイスのジュネーブにあるWHO（世界保健機関）で行われたときの植樹の様子です。

くしくも、この年に、ここにいらっしゃる日比野先生が長崎を訪問してくださいました。若かりし日比野先生です。若いでしょう。

日比野 海老沼さんも「若いなあ」と思って見ていたけれども……。

宮島 自分もでしょう。私は、写真をきちんと取っておいたのです。

海老沼 宮島さんの写真が出てこないですね。

宮島 僕は、ここにいます。

あそこに日付がしっかりと書いてあるでしょう？ 1998年7月17日です。

日比野 このようなときに役に立ちますね。

宮島 役に立つのです。

日比野 うん。

宮島 普段は、あのような日付を「ちょっと邪魔だな」と思っているでしょう？ 意外とこのようなときに役に立つのです。

ほら、ここで笑いを取ろうと思って仕込んでおいたのです。

日比野 このような写真をよく撮りましたね。

宮島 右側の写真は、長崎の爆心地です。爆心地の本当にその上空で爆発したところを見つめている日比野克彦です。

日比野 それを宮島さんが撮っていたのですね。

宮島 そうです。

実は、この1998年、日比野さんにはプロジェクトに何か関わりを持っていただきたいということでお声がけしたら「まず、長崎に行かないとな」ということで、長崎にわざわざいらっしゃって、海老沼先生にも会っていただいて、爆心地の中空を見つめてくださったわけです。それで、左の上のほうにある親木のところまで行って、その木を見つめてくださっています。

このようにして日比野先生に関わっていただいて、1999年のヴェニス・ビエンナーレで、柿の木プロジェクトが日本の代表として展示をすることになりました。そのときに日比野さんにデザインしてもらった柿の木風呂敷がこれです。皆、マントのようにかけていますね。本当だったら、日比野デザインというと「これ(=費用)」が大変なのです。でも、これらは全部、ただです。いまだに使わせていただいて、ありがとうございます。

それで、実は、この柿の木風呂敷を着て、このときには日比野さんにワークショップもやっていただいたのですね。

日比野 そうです。

宮島 覚えていますか。



若き日の日比野氏(スライド)



長崎の爆心地付近で空を見上げる日比野氏(スライド右)



柿の木風呂敷をかけた子供たち(スライド)

日比野 覚えています。オープニングの日に、日本館のちょうど前の少し坂になっているところに、通りがあって、そこでやりました。もともと、この柿の木の風呂敷は、包んだときに結び目が柿のオレンジ色になるようにデザインしているのです。

宮島 そうです。

日比野 風呂敷というと、僕らの時代かもしれませんが、子供的にはスーパーマンやパーマンのマントのようにどこにでも飛んでいけたり、何となく強くなる気がするのです。そのような風呂敷は、包んだりもできるし、何かの魔法のような力を秘めているというのがあります。それと、「だるまさんが転んだ」という日本独特の遊びがあるのですが、あれは不思議な遊びで時間を止めるのです。「だるまさんが、こーろんだ」で時間を止めるのですが、あの、前にしか進まない時間が止まるということが、子供的には「時間、止まってるよ」「止まった」みたいなことで、腹を抱えて笑いたいぐらいおかしくてしょうがない。止まっていると「動きたい」「動きたい」「動きたい」「動いた、動いた、動いた」「動いてない」「動いた」というように抗うしかない、でも、しょうがないというように、時間をテーマにした「だるまさんが転んだ」という遊びを、表でワークショップとしてやりました。日本パピリオンは1階に広場のようなところと屋内と屋外があって、中のほうでは宮島さんが現代美術家としてデジタル化の作品を展示していました。

宮島 宮島達男が「メガデス」というデジタルカウンターを展示して、下の階でこの「柿の木プロジェクト」をやりました。

実は、「時の蘇生・柿の木プロジェクト」が正式タイトルなのですが、今も言っていたように時に関係しているパフォーマンス、ワークショップをやっていたのです。それで、日比野さんは、ヴェニスにわざわざ自腹で来られたのです。ヴェニスに自腹というのもすごいですね。(会場から笑いと拍手)

ありがとうございます。ちなみに、上のほうの左から2番目にいる女の子は、実行委員の吉武真理さんです。ここにもいらっしやると思いますが、あそこで手を挙げていますが、彼女の若いときの写真です。

という具合にいろいろと展開していただいて、ヴェニスの展示が皆さんのお力で成功しまして、それがきっかけで今のようなかたちで世界中に広がるようになりました。ヴェニスの展示を見て、世界中から200件以上の植樹申し込みがあったのです。

これが、その一つのアメ리카です。アメ리카というと、原爆を落とした国です。しかも、これは、ダラスのホッカディー・スクールです。ダラスは、非常に保守性が強い南部の地域です。エノラ・ゲイ展が中止になったり、原爆に対して非常に抵抗がある地域だったのですが、(同校の)リー先生が申し込みをされて、一生懸命に周りの先生たちを説得してこのプロジェクトを実現させました。今でも元気に育っています。

これは、イタリアのピチェンツァで行われたときの様子です。

「柿の木プロジェクト」は、今、世界26カ国、320カ所で植樹が実現

しているのですが、ワークショップや植樹のときのアート表現は、その国によってそれぞれ違うのです。プロジェクトとしては「こうしてやってください」「こういう表現をしてください」ということは一切言いません。でも、子供たちを囲んでいる大人たちが、自分たちの発想で「こうしたらいいんじゃないか」「こうやったら面白いんじゃないか」と考えて自主的にやっているのです。ですから、国によって表現の仕方がいろいろと違います。これがまた面白いところです。

これは、イタリアのカシャーゴにある、マンゾーニ小学校のとき。このときには、町中で仕事を全部休んでもらって、道路を完全封鎖して、そこに蠟石で絵を描いたり、教会で演奏会や合唱を行ったり、「子供たちのための柿の木の平和の一日」にしてしまっただけで丸一日遊ぶのです。イタリアは、そのようなお国柄というか、すごいです。

これが、オランダのライデンで行われたときの様子です。

これは、アイルランドでの植樹の様子です。このアイルランドはカトリックとプロテスタントの対立があったところで、とても印象的だったことがあります。それは、「柿の木プロジェクト」を行うときにティナヘリー・コートセンターという文化センターが主体になってやったのですが、それまではカトリックの子供たちが通う学校とプロテスタントの子供たちが通う学校は別々だったのが、柿の木の植樹のときには両校で柿の木育成委員会をつくって、子供たちの代表がこのときだけ唯一、一緒になって活動したのです。

日比野 あれは、海老沼さんですか。

宮島 海老沼先生です。真ん中です。

日比野 行ったわけね。アイルランドまでね。

宮島 このように柿の木の物語を演劇風にやっていただいたり、一緒になってやりました。

「明後日朝顔プロジェクト」

宮島 次のスライドで、これは何かというと、実は、日比野さんが「明後日朝顔プロジェクト」をやっておられて、これもその当時、僕が非常にインパクトを受けたプロジェクトです。

「柿の木プロジェクト」は、先ほどもご紹介したように植樹とアートを混在させて地域に植えていくのですが、アートとして全く捉えられていなかったのです。そして、地域に入っていくワークショップ的なアートは、当時は、あまり認められていなかった。そのような動きが若い表現者の間で少しずつ出てくるようになって、越後妻有のときに日比野さんもこのような「明後日朝顔プロジェクト」をやり始めて、それが急速に飛び火するように全国に広がっていきましたね。

日比野 そうです。これは、2003年です。「大地の芸術祭」は2000年から始まって、僕が参加したのは2003年の2回目のトリエンナーレ「大



明後日朝顔プロジェクト(スライド)

地の芸術祭」です。でも、正確に言うと、このときは「明後日朝顔プロジェクト」という名前はまだ付いていなかったのです。このときは、「明後日新聞社文化事業部」というタイトルの作品でした。100人ぐらいの小さな集落ですが、「この地域の人たちと共同作業できるものがないかな」ということで、そこのお母さんやお父さんに、それぞれ本当に最初は「初めまして、日比野です」と挨拶をしに行きました。そのとき「何か一緒にできる作業はないかな」と言ったら、お母さんから「うちら、野良仕事は得意すけね。そのために、腰、曲がとるすけ。あはは」というように「すけ」という方言で。「あ、じゃあ、お母さん、一緒に何か育てようか」と言ったら「ま、夏だからアサガオすけ」と言われて、文化事業部の事業としてアサガオを始めたのです。

会場が廃校になった小学校だったので、どうせ始めるのだったら、よくある鉢植えはやめて、軒下でなく屋根までロープを張って「もう、ここ全部、アサガオで覆っちゃおうよ」と言ったら、「そんなことできるわけねえ。ほんとおまえ、何も知らんな」とお母さんたちに笑われたのですが、いざ、ロープを張ると「伸びるといいよね」となったわけです。ロープを150本張って「ひょっとしたら1本ぐらい伸びるかもね」と言って、皆で何となくワクワクし始めました。そして9月の末ぐらいになったら、お母さん、お父さんたちも「すごいね」「これ、面白いね」となって、トリエンナーレで「また3年後ね。ばいばい」と言おうと思ったら、「種ができたから来年もやるすけ」「やろう、やろう」となりました。「種ができたから来年もやろう」とはどのようなことかという、「毎年やる」「終わらない」ということです。それで「今年も」ということでずっとやっているのです。

ですから、まだこのときは「アートプロジェクト」とは呼んでいなくて、「アートプロジェクト」という名前が正式に付いたのは、このあとの2005年に水戸芸術館で展覧会をやったときで、そのときもアサガオをやったのですが、新潟のお母さんたちが苗を持って水戸にやって来たので

す。それで、水戸の人たちと一緒にアサガオを育てて、水戸の人たちも、お花屋さんで買ってきた種とは違い、「新潟からわざわざ持ってきてくれた苗だから、これは大事に育てなくちゃいけない」ということでアサガオを育ててくれたのです。そして2007年に金沢21世紀美術館でまた展覧会をやることになって、そのときに今度は水戸からアサガオを持っていったのです。

宮島 水戸から？ 今度は、水戸なのですね。

日比野 そうです。

宮島 新潟から水戸に来て、水戸から金沢ですね。

日比野 金沢です。それが2007年で、そのときは、このアサガオをやったのは13地域だったのです。ちょうどその頃は、岐阜県美術館や熊本市現代美術館、霧島アートの森などで展覧会をやるタイミングが続いて、そのたびにアサガオと一緒にやったのです。そうすると、21世紀美術館で行ったときには13地域から皆が苗を持って集まってきて、21世紀美術館のあの丸いところを全部に2,000本のロープを張って、このときに「明後日朝顔プロジェクト」という名前が付いたのです。

宮島 そのときに正式にですね。

日比野 正式にです。それまでは「アサガオ」「アサガオ」と言っていたのですが、今、宮島さんが言った植物の活動が正式にアートプロジェクトになったのは2007年です。でも、活動はその以前(2003年)からです。

宮島 そうですね。ということは、新潟なら新潟、水戸なら水戸で活動されていたと思いますが、その頃、「3331」の準備もやっていたでしょう。

日比野 はい、「アーツ千代田」のですね。

宮島 これ(「明後日朝顔プロジェクト」)は、毎年、それぞれの地域でずっと続けてやっていくのですか。

日比野 21世紀美術館の場所からはずれているけれども、金沢市内でやったり、水戸はずっと水戸芸術館でやっています。ずっと続けているところもあれば、途中でやめてしまうところもあるし、復活するところもあります。そこは、それぞれの事情です。でも、たくさん広げることが目的ではないので、今は29地域ぐらいでしょうか。

宮島 広がっているではないですか。

日比野 でも、17年間で29地域だから「まあ、そんなもんかな」という感じです。

宮島 そのときに、日比野さんは「今年もやってくれ」というように何か指示出しをするのですか。

日比野 「ちょっとやりたいという人がいます」というような声を聞くと、トライアル期間のような感じで、最初に始まった^{まぎらひら}蒞平になるべく来てもらうようにしています。それで「明後日朝顔」の「7つの気持ち」というものがあって、初めにそれをきちんと理解してもらったうえで始めていくというのはあります。

宮島 では、地域の人たちに、自主的にどんどん広がっていくという感じはあるのですか。

日比野 かなり広がっているけれども、種をもらって行って、種に関する細かい説明は「まあ、いいか」というふうにして、まいてしまう場合もあって、昉平から始まった「明後日朝顔」の種とは知らずにまいている人もたくさんいると思います。やはり普通は、アサガオというと、花に目が行ってしまうのです。それで枯れると、「みつともないから早く片付けよう」という話になるのです。

けれどもそうではなくて、植物にしてみれば、やはり種を付けるために花を咲かせるわけですから、種になったからには「次の年に」となってもらいたいというのがあります。というも、種はきちんと暗いところに置いておけば2年でも3年でも、次のチャンスまでわりともつのです。「明後日朝顔」には10年物などがあって、それでもきちんとまた水分をやると芽が出るのです。

ですから、その力というのは、海老沼さんの話の中の写真にもあった柿の木の芽が出たときと同じように、新潟から水戸へ来て種から芽が出たときに「あ、つながった」「これでやっとな水戸にもちゃんとなじんだ」と思うのです。

それで、寒いところから暖かいところに来るとやはり環境が違うので、面白いことに新潟のアサガオの種を暖かいところでまくと、夏が短いと思っているので最初はシュシュシュと急速に伸びていくのです。けれどもそのうち「やべえ、まだ夏終わってねえ、夏長え」ということで、そのときに採れた種はまたきちんと覚えていて、すぐになじんできます。

宮島 その地域に、ですね。

日比野 そうです。種を見ていると「記憶をちゃんと持っているんだな」と思います。地域と地域をつなぐ、時間をつなぐ、種がそのような記憶をもっている。種を収穫したときから始まるということが「明後日朝顔」のスタートなのです。

ですから、花をめだたり、あるいは一時はメディアで、エコカーテンとして熱を遮るというような言い方をされてしまうときもあるけれども、「そうじゃないよ」というところをきちんと伝えていくことは守っています。

宮島 今の「種を継承していくときに何かがつながった感じがした」というのは、僕にもそのようなところが強くあります。ご承知のように、僕は、普段、テクノロジーを使った仕事をずっとしているのですが、偶然、柿の木という植物に出会ってしまって、植物を育てることは別に趣味でもなかったのにそのようなことに関わり始めて、植樹が次へつながって、またそれが大きくなっていくという循環をするようになると、継承している、平和の種を実際に植えているという気にもなってくるのです。ですから、植物を植えていく作業は、不思議なものです。

それから「明後日朝顔」もそうですが、先ほども言ったように柿の木も植樹式のときにいろいろなアートイベントをしていくのですけれども、

それは、僕らが指示を出して「これやってください」というようなことは一切言わないで、地域の人たちが勝手に考えてやるのです。彼ら、彼女たちは、大変な思いを持って臨むのです。今日の東京富士美術館もそうですが、連休返上で、お父さんを駆り出したり、親戚も連れてきて皆で飾り付けをやってしまうような熱量が自然に広がっていくのです。それがとても面白いのです。僕は、普段の仕事では指示を出してしっかりとプロジェクトを進めるのですが、柿の木を契機として、自分では全く予測がつかないようなことがそこで行われていく様にとっても影響を受けました。

自分で始めたプロジェクトなのに、子供たちはもちろん、周りで関わってくれる人たちのエネルギー、熱量がすごいのです。それによって自分のアートに対する考え方が次第に変わってきました。

つまり、アーティストだけが何かを表現しているのではなくて、もともと、一般の人たちの中にもアートは存在していて、それが何かのきっかけで一気に出てくるというか、その表現力、創造力はすごいと思始めているのです。

日比野 「アーティスト」と言うと、例えば「演奏する人がアーティストだ」というように思われがちですが、そこには鑑賞者や対象を見る人もいますね。

宮島 そうです。

日比野 宮島さんの作品を見て「うわっ」と思う人がいるわけです。その人が「うわっ」と思うのは、宮島さんが「『うわっ』と思え」と言っているわけではなくて、宮島さんの作品を見て何か感じるものがあるとなると、やはりアーティストの役割は、鑑賞者、見る人のスイッチを押すことを作品を通して行うということなわけです。「作品がアート」なのではなくて、アートを通して鑑賞者の「うわっ」と思う気持ちのスイッチを押すきっかけがアーティストの作品であるのかもしれない。

そうなってくると作品は、宮島さんが展示しているデジタルの作品もあるけれども、例えば今日の昼前にやったように、海老沼さんが持ってきた被爆の柿の苗木のようなものもあります。今日、それ(被爆の柿の苗木)を初めて見た人たちもいるし、その話を聞いた人たちもいます。なかには、原爆のことは少し遠い出来事で、いろいろな教科書を見て知っていたけれども、「えっ、これ?」「これが?」ということていろいろなイメージが湧いてきて、今、宮島さんが「熱量」という言葉で表現したように、「じゃ、私もあしょう」「こうしょう」「動いている人たちが私がフォローしよう」ということで次々と輪が広がっていきます。そうすると、アートとは、別に美術館にあるホワイトキューブの作品だけではないというところがあるのではないかと思うのです。

宮島 全くそのとおりで、「柿の木プロジェクト」では、例えば「このようにワークショップで作ったもの、これがアートなんですか」あるいは「植えられている柿の木、これがアートなんですか」と聞かれたりします。

日比野 「これ、作者は誰ですか」と……。

宮島 そうです。そう言われると、もう答えようがないのです。なぜなら、僕は、これを何も作っていないではないですか。海老沼先生の柿の木をいただいて、それを皆さんにつなげているだけで、実際にオーガナイズをしているのは美術館のキュレーターや小学校の先生だったりするのです。その方たちが一生懸命にやっているだけです。

でも、僕は「その全体は、やはりアートとしか読めない」と思っていて、単なる植樹運動ではないし、単なる平和活動でもありません。僕の中には、「それは、アートでなければいけない」ということがあるのです。でなければ、乗り越えられない。アメリカには植樹できません。あと、宗教対立があったアイルランドにもやはり植えることは難しかったです。

実は、韓国にも植えていて、これがそうです。2000年に最初に柿の木を植えたのですが、まだまだ日本に対する偏見・反感がある地域だから、「日本から持ってきた柿の木だ」と言うだけで引き抜かれてしまったのです。それでも在日だった河先生が「もう1回植える」と言って植えました。そうしたら、その新聞報道がなされたのと同時に、今度は出てきた芽をカッターで2回も切られてしまいました。

それで「もういいかげんに諦めましょうよ」と言ったのですが、河先生は諦めなくて、3回目の植樹をしました。鍵がかかっているところを示し、「あそこに植樹した」と言うのですが、「実は、あれはダミーの木です。切られてもいように偽物なのです」と。本物の柿の木は、秘密のうちに少し離れた場所に植えてあって、2014年に実が成ったのです。

という具合に、原爆や特定の国に対して非常に反感のある地域にそのようなものは、なかなか植えられません。でも、アートであるからこそ越えていけるものがあって、それもこの「柿の木プロジェクト」で実感した点なのです。

日比野 ですから、「アートはどこにあるのか」というような話で、「素晴らしい絵ですね」とアートオークションで落札したのもモノとしてはあるけれども、「じゃ、そのアートは、どこから生まれてきたの」と元をずっとたどっていくと、やはり、よく分からない。人間の力が及ばないところに対して恐怖を抱いたり、喜びを感じたり、単純な話で人が死ぬと「えー、なんで死んじゃったの?」とか、あるいは「何か生まれてきた。何だろう、これ」ということがあるとき、またあるいは、急に雷が鳴ったり、日食や月食のような出来事が起きて、急にそこで叫び出したり踊ったり、代わりのものを具象化したりするところから、何となく造形や踊りや叫びや歌声とかいう表現が出てくるのではないですか。

いろいろなところの柿の木を見た子供たちから話を聞くと「へえ」と思うのは、きっとアートが最初に生まれたときの感覚を共有している瞬間がそこにあるのだと思います。ですから、宮島さんが言ったように、国が宗教的に対立していたり、紛争中のところの話でなくても、モノのレベルでアートはあるのだ、そこに気づくためのメッセージなのだというところが柿の木の一番素晴らしいところ。

宮島 そうですね。僕もそのような意味で、柿の木の植樹をするときには、何とか仕事の都合をつけて行くようにしているのですが、毎回、植樹地の人たちの努力や熱量や子供たちのエネルギーのようなものをもらって、ずっとやってきているのです。国際デビューしてからもう30年たつのですが、今まで現代美術家としてやれてこられたのは、実は「柿の木プロジェクト」で浄化されてきたからだ、今は本当に思っているのです。

日比野 よかったですね。

宮島 本当です。日比野さんご承知のように、特に最近では、アートマーケットばかりではないですか。そうすると、「誰が上だ」「誰の値段のほうが上だ」と、絶対にそのような話にしかならないでしょう。もうそのような世界は、惨たる世界で、本当に疲れてしまうのですが、毎年、柿の木の植樹などをやっている、アートの本源的なものに触れている感じが、僕にとっては有用で、「癒やし」と言うのも変ですが、アーティストとしてやってこられた唯一のポイントだと思っているのです。ですからやめられなくて、ずっと続けているところがあるのです。このようにおもちゃのような表現ですが、とてもかわいいでしょう。これは、バルギーでやったときですが、子供たちを小さいフェアリーにして、柿の木をフェアリーが守っているという想定です。

日比野 フェアリーが、いるのですね。

宮島 そうです。それでいろいろなメッセージを子供たちが書いて、小さいフェアリーたちが守っているというところなんです。

「Art in You」

宮島 このような「柿の木プロジェクト」をずっとやってきて至った考えの一つは、「Art in You」、先ほど言った「アートはすべての人たちにあふるのだ」ということ。それを少し考えてみたいと思います。

アートとは、楽しさや美しさ、先ほどは、驚きや感動、それは人と人との共感のようなこと、共時性があるというか、「根源的な」という話をしたと思うのですが、そのように根源的な何かに触れていく共時感や共感性のようなものがしっかりベースにあって、それがやはりアートが持っている一番大きな力ではないかと思うのです。

それを僕などは「Art in You」と呼んでいて、すべての人には、もともと「アートのなるもの」があると。そのような「アートのなるもの」がなければ、例えば、いい音楽に感動したり、作品を見たときに「素晴らしい」と思ったり、夕焼けの空を見たときに「きれいだな」と思う心などあるはずがないから、人間は、そのような「ソウゾウリョク」のようなものをもともと持っていて、それがアートを形作っているのではないのでしょうか。

この「2つのソウゾウリョク」という話はいつもするのですが、アートに

は「2つのソウゾウリョク」があつて、例えばイメージーションの「想像力」は見えないものを見る力、他者の痛みすらも自分の痛みのように感じる共感性などの力で、「創造力」はいわばアーティストが持っていると思われる思いを見えるように形にする力だったり、問題を突破する、問題解決をしていくような力のことを指していて、僕は、この2つがあると思っています。

ここから平和のことにつながっていくのですが、普通、「戦争」の反対語は「平和」と考えるではないですか。でもベクトルにすると、「戦争」には分断や不信や恐怖をネックとする要因がとて多くてマイナスのベクトルを持っているのですが、「平和」はゼロ・ポイントで、プラス要因としての反対語は何かというと、結合する力や共感や喜びなどのプラス方向に思い切り振れていく力であり、これが「アート」なのではないかと、最近思うようになっていくのです。

つまり、「戦争」の反対語は「平和」ではなくて「アート」なのではないかと、最近思っているのです。「Peace in You」「すべての人にアートがあるように、平和はすべての人にもともと備わっているのではないか」というのが、このプロジェクトをやってみての僕の結論です。そのようなことを考えながらずっとやっています。

日比野さんは、初期の頃からいろいろと「柿の木プロジェクト」を見てくださっているのですが、参加したり、見たり聞いたりしているなかで感じることは何かありましたか。

日比野 宮島さんの最後のベクトルの話は、今まさにまたウクライナとロシアのことがあるから、なおさらいろいろと考えるけれども、例えば音楽の人と話していると、ロシアには優秀で有名な作曲家がたくさんいて、やはりロシアという国とロシアに住んでいる人を一緒にしてしまうとおかしくなってしまうとか、理解しにくくなってしまいますのです。

地球上に人が77億人いるとしたら、国は、人口が何人、面積がどのくらいという数字で表すけれども、人間は、1人は1人でしょう。これから言うことが正しいかどうか分からないけれども、アートは国ではないでしょう。

宮島 そうです。

日比野 「Art in You」や「Peace in You」の「You」は「あなた」ですが「私」でもあつて、「私」以外の77億人全員は自分ではありません。お父さん、お母さんも自分ではありません。他者は、先ほど「共感」という言葉があつたのですが、今、宮島さんが何を考えているかということは想像するしかありません。「僕が言ったことをどう感じているのかな」と想像するしかありません。「きっと分かってないだろうな」と思いつつも「分かってくれているところもあるだろうな」と思っているのです。一緒にないことは分かっているわけです。「誤解されているな」ということは分かっているけれども「共感されているものもあるな」ということも分かるのです。ですから、違っていなければ自分が何だか分からないので違っていていいのです。共感もそうですが、違いを認められること、同じで

はないところも共感できることがとても大事です。

宮島 違いを認め合うということですね。

日比野 違いをです。ですから、同じでなければ「俺の言うことを聞け!」となってしまうとおかしくなります。

宮島 それは、善の暴力になりますね。

日比野 白黒は、はっきりしないわけですが、皆が、分かっているような分かっていないような、「分かってないけども何かいいやつだな」というようにグレーなのです。

宮島 今、まさに言った「グレー」は、アートは白黒をはっきりとつけたいでしょう。

日比野 そう、アートはね、分からないものを唯一受け入れて皆が納得するものだと思います。

宮島 分からなくてもいいからね。

日比野 分からなければ「アートだから」と言う、「そうか、アートだからか」と言ってほしいが納得できるのが、アートのすごさです。ですから、学問ではないのです。

宮島 そうです。ですから白黒をつけて、「君は正しい」あるいは「君は間違っている」と言えないですね。

日比野 言えません。

宮島 それがアートが持っている共感性や共時性だと思うのです。そこがとてもピースフルだと思います。

日比野 今、科学は「医学も宇宙も人間が分からないことすべてを科学が分かるようにしてくれ」「もっともっと知りたい」「人間の遺伝子、病気を治したい」「宇宙は最後にどこに行くのか」ということも全部を分からせてくれるのだろうか、人間にはそのようなところがあるから進化してきたのですが、分かったと思ってもその先には分からないことが絶対にあることは分かっているのです。分かったところで「その先は、どうなってるの?」「分からない。また勉強しましょう」となるではないですか。で



「Peace in You」(スライド)

すから、どこまで行っても絶対に分からないものはあり続けるのです。

宮島 そうです。

日比野 先ほどの話でも、そこには、もうアートしかないのです。もっと引っ繰り返すと、アートは最初にあったのだと思うのです。

宮島 僕もその考え方は本当にそのように思います。アメリカの教育は、アート・ベースです。「リベラル・アーツ」があるように、5教科のベースにアートがあるのです。アートのなるものがあって、その上に数学や国語や社会があるというような話です。やはり、そこだと思うのです。

日比野 「人間がアートを作る」というと「モノ」になってしまうけれども、「アートが人間をつくる」「アートから人間が生まれてきた」という言い方です。アートから宇宙さえも生まれてくる。

宮島 すごいところに行きますね。

日比野 そのほうがアートを理解しやすいです。

宮島 確かにそうですね。先ほどの「Art in You」もそうですが、特に現代アートは「分からないことを分からないまま認める力」というようなものを鍛えてくれるのではないかと思います。なぜなら、本当は、分からないことだらけではないですか。このパンデミックも「COVID-19」というようなウイルスが、これほど科学が発達した世の中にまだ存在していたのか」というような話でしょう。これほど小さなウイルスを見つけられなかったし、地球全部を席卷してがらりと変えてしまったし、今のところは退治もできていないではないですか。そのような分からないものに囲まれているにもかかわらず、実は、人間は「分かっているような気持ち」になってしまっているというか、全部コントロールできてしまうというようにとても傲慢になってしまいました。

日比野 「専門家をお呼びしました。先生、どうしたらいいでしょうか」「そうですね、マスクをしましょう」「そこか。俺でも分かるわ」となると、専門家はどのような存在になっているのでしょうかね。

宮島 確かに科学的ですが「誰でも分かるよね」となりますね。そのように考えると、アートや「柿の木プロジェクト」もそうですが、あらゆる人々が、日々、ある種の「分からなさ」とうまく付き合っていく方法を実は日々鍛えられているとするなら、もっともっとアートに触れていくべきではないかと思うわけです。そのようなことで、藝大の学長になった日比野先生に、これからのアートの行方をお伺いしたいと思います。

「アートの行方」

日比野 「アートの行方」ということですが、私に限らず、宮島さんは世界中で活躍していて、いろいろな国の状況を見てきていると思うし、東京藝術大学と言っても、たかが135年ぐらいです。

宮島さんは、何歳になりましたか。

宮島 65歳です。

日比野 僕も今年64歳になります。二十歳の頃は、藝大が九十何年と聞いて「藝大、すげえな」と思ったけれども、64歳になって藝大が135年と聞くと「何だ、俺の歳を倍にしてちょっと足せば、藝大と歳が同じじゃないか」「若いな」と思うのです。

ですから、藝大も、東京、日本の芸術大学の考え方も含めて、まだまだ若いわけです。今は、やはり地球環境の問題を考えると、一つの単位も100や1,000、下手をすると1万年単位でいろいろなことを考えられる物差しになってきているのではないですか。日本というか世界のアートは、これから1,000年後にどのような考え方で教育されていくのかとなると、デジタルの世界も変わってくるし、発信方法や扱う道具が変わってくると思考能力も変わって、メタバースの世界も入ってきたりすると、かなり変わると思うのです。

そのようなときに、先ほどの「Art in You」という考え方や「アートは、どこから来たんだろう」という疑問、あるいは分からないものを引き受けるアートの特性は、かなり大きな力になってこなければいけないのでしょうか。

宮島 そうですね、とても必要な力になってくると思います。やはり人間として生きるうえで社会が柔軟にコントロールできないものと対峙していくときに、非常に重要な力を養成していくというか、醸成していくというか、そのような力になり得ると思っています。

ですから、例えば藝大もそうですし、このような美術館もそうですが、一般の人たちにもっともっと開いていって、そのような「分からなさ」というようなものに触れていく、先ほど言ったように「アートのなるもの」をほんの少しのきっかけで発動させる働きをするような機関になっていかなければ、この先は、ますます細っていくばかりではないでしょうか。

この前、イーロン・マスクも「人口がどんどん減っていくと、日本は、しまいには潰れていく」というような話をしていましたが、人口が減るだけではなくて、やはりそこに住んでいる未来を担う子供たちにどれだけのポテンシャルを与えていけるかが重要な課題になってくるのではないのでしょうか。それには、やはり「アートのなるもの」が非常に効力を発揮すると思うのです。

日比野 日常の中ではそれほど頻繁には使わないけれども、「心」という言葉があるでしょう。「気持ち」という言葉もあって、「気持ち」と「心」は少し似ているのですが、両方とも分からないものです。

宮島 確かに普通に使っているけれども、結構分らないです。

日比野 「あなたの心が読めないわ」「僕の気持ちを分かってくれないのか」というように、分からないですね。自分の心も自分で分かっているかという、少し微妙です。

昨日の気持ちと今日の気持ちは同じかという、同じではないと思います。あしたの気持ちもきっと変わってくると思います。それが人間の一番大きな生きる力になっていて、東日本大震災などの災害や、今の

ウクライナもそうですが、僕も被災地に行ってお話を聞いたりすると、時間が止まっていて心や気持ちが動かなくなるように感じるのです。でも、心は動いているので「あ、いるんだな」と分かるのです。気持ちも動いているから「ここにあるんだな」と分かると思うのです。

宮島 「心が動く」というのは、とても重要です。「感動」が、そうですね。

日比野 気持ちも心も止まってしまっていると感じると、生きる力が徐々に落ちていって、過去を振り返ることも苦しいし、未来を思うこともできません。今を見つめて「1秒のスピードは、これほど遅いのか」というぐらいに気持ちも心も動かなくなってしまうような人たちが、震災などの直後に見えたりしました。



宮島氏

でも、そこからまず、10秒先のことを思って行動し、1分先、5分先、1日先、1カ月先、1年先を想像すると自分の心が動き始めます。過去のことを振り返っても「ああ、こんなことがあったな」「よし、もっと頑張ろう」といえるくらい気持ちや心がゆらゆらと動き始めると、「ああ、これが生きていてよかった」「生きたい」「生きるぞ」「もっと生きたい」「頑張ろう」というような力になってくるのです。

ですから、気持ちと心を動かすというか、止まらないように動かしていくときにアートの力が生まれる瞬間で、心の揺らぎのところからアートの苗床が生まれてきて、今日の午前中に柿の木2世の苗木を植えたときにも、皆の気持ちや心が動いて、過去のことを想像したり思い出したり、自分は経験していないけれども柿の木を通して「あ、1945年にそんなことがあったんだ。そうしたら、これからどうすればいいんだろう」と考えたりすることで時間が動き始めると、自分の心や気持ちも動き始めて生きている実感をそこで味わっていく。僕は、それがアートだと思うのです。

宮島 とても大事な話をしてくれていて、つまり、心が止まってしまったら本当に死んだようになってしまうというのは全くそのとおりで、心を動かす訓練ではないですが、そのようなことをしていなければ、やはり動かそうと思ったときに動かないのです。

ウクライナのことを考えるといつも思うのですが、いったん戦争が始まってしまったら、僕らは、もう何もできないのです。「アート」と言っても何もできません。無力です。

ですが、戦争が始まる前だったら、いくらでもアートの訓練ができたのです。心を動かす訓練ができていたり、先ほど「Peace in You」と言

ったけれども、平和という種を常に動かしていく、そのような訓練をしていたら、例えばウクライナとロシアの人たち同士が、それまでもっとも仲良くしていれば、戦争を阻止することができたのではないかと非常に思うのです。

ですから、ユネスコ憲章で「人の心の中に平和のとりでを築かなければならない」と言っているように、この平和で何もないときに僕らの心を動かしてその準備をしておかなければいけないのではないかと、最近はとても思っているのです。

日比野 違いを受け入れ合い、分からないものをきちんと受け入れ、分からないものがあることを否定しないことです。ここに違う人間が2人いたら、「同じじゃないけれども違っていいよね」とここで理解できるのではないですか。

ということは、ここに10人いて、言葉も違う、身体的特徴も違う10人で「違っていても、それでいいよね」ということが理解できるのであれば、世界に77億人いたら、それを7.7億倍すればいいだけの話なので、そのような世界は、あり得ると思うのです。

宮島 想像ができるようにですね。

日比野 想像できますね。10人の違いを認め合えるのだったら、それを7.7億倍すれば「世界中の人たちが違っていいんだ」ということが想像できるのです。そうであれば、きっと違う社会というか、他のものができてくるのではないかと思います。

今はやはり、分からないものには「自分の代わりに誰か意見を言ってくださいよ」「分かった。おまえの意見は、だいたい、こういうことだろう」「いや、そうじゃないんだけど、まあ、そっちで何とか言ってくださいよ」というかたち、多数決という考え方です。1票でも多いほうが多数派だということなどで動かすのは、今の時代に多くの人数をコントロールしていくためには必要だった手法かもしれないですが、これだけのインターネットがあれば、ひょっとしたら本当にメタバースの中で違う社会が生まれるだろうし、今後は少し違って来るかもしれません。ですから、その中と両方をパラレルに動かしながら1,000年後は、もっと違う感覚の社会、そしてアートの社会に対して及ぼす機能は全然違って来るのだろうと思うし、今は、ちょうど過渡期だと思います。

宮島 そうですね。今日、アートの役割をいろいろと掘り下げてきたわけですが、もう所定の時間がたってしまいました。

美術館からの要望で、今日はせっかく日比野さんが来ているので、会場から質問を受ける質問タイムをとりたいと思います。

アートを一緒に楽しむためには

質問者A 今日は、ありがとうございます。

私からの質問は、「アートはよく分からない」というのは本当によく聞

く話だと思っていて、地域の中でやる場合は、アートに理解がある人もいれば、そうではない人もたくさんいると思うのです。

その中で何かよく分からないことをやるとき、地域の人たちの「何だ、これは」というような反応などもあると思うのですが、その辺りのコミュニケーションの取り方というか、分からないものをどのようにして一緒に楽しめるのかということをお二人はたぶん地域の中でいろいろとされてきていると思うので、教えていただければと思います。

宮島 僕からでいいですか。

これはとても重要なことで、分からない人たちを巻き込むときに分からせようと思っていたら入ってこないのです。ですので、飲み会をやりません。とりあえず仲良くなるのです。

理解してもらおうと思って地域に入っても絶対に分かってくれないので、巻き込んでしまいます。まず、仲良くなって身内になってしまうのです。そうすると、「何か分かんねえけど、しょうがねえな」と言って手伝ってくれる。手伝ってくれると、「自分も何か面白くなってきたな」と言って次第に盛り上がって勝手にやり出すのです。僕は、それが「Art in You」だと思います。もともとあるのですが、何かの気づきによって少しブロックしているところをちょっと外してあげるのです。それには、やはり人間的に仲良くするしかないと思っています。

日比野 先ほど「明後日朝顔プロジェクト」の写真が出てきましたけれども、あのときもまさにそうだったのです。僕が十日町の山の中の筋平という集落に行って作品の説明をして、「明後日新聞社文化事業部をやります。作品を東京から持ってきて教室に飾ります」と言ったら、お父さん、お母さんたちに「うちら、アート分かんないすけ」って言われて終わったので、「終わったわ、これ」でした。

でも、首長さんが、ぜひ、この地域でも「大地の芸術祭」をやりたいと言って手を挙げて頑張って参加してきたので、僕も呼ばれたときには村の人たちが「うわーっ」とやってくれるのかと思ったら首長さんだけで、他の人は「うちら、アート分かんないすけ」でした。

「あ、これは大変だな」と思って、そのあと、まさに「茶もっこ」というお茶会が始まって、お茶を飲んで、米菓子を食べました。そうしたら、方言が非常にぎついです。言っていることが8割方分かりませんでした。ますます「やばい」と思ったのですが、「お米、おいしいですよ」「雪、深いですよ」という話題で話が終わって展開しないので「つらいな」というときに、やはりこちらは話のネタを探さなければ。沈黙が怖いというか、誰も僕のほうを見て話していなかったのです。お母さんたちが4～5人で話していたので「どうしようかな」と徐々に孤独になっていきました。

そのとき、廃校になった学校の校門にパンジーのような黄色い小さな花が植えてあったのを思い出して、お母さんに「廃校になったとこに花を植えてあったけど、あれ、いつも植えているんですか」と聞いたら「いや、あれは、東京からお客さんがござるすけ、植えたいんだ」と言

ったので、「『おまえら、あっち行け』みたいに拒否されてはいない」と思ったのです。

廃校になって13年たったそこは、お母さんたちが卒業した学校だったのです。そこにアートがやってくるとなると「何？ 何かペンキ塗ったりするの？」というような……。

宮島 「何されるの？」みたいな……。

日比野 「何されるの？」「こいつが何かやるのか」という感じでした。それで、そこで何をやるのかと聞かれたので「新聞作ります」と言ったら、「こんな田舎で新聞作って、どうするんすけえ」というような話になって、ますますよく分からなくなりました。

「とりあえず校舎にペンキを塗ることはなさそう。でも、新聞作りはうちらに関係ねえな」というようになってしまつて、それで「花、植えたんだ」と言われたとき、お母さんが花を植えたことによって僕にお母さんの気持ちが伝わったわけです。それで、その茶もっこの中で「ああ、お母さん、じゃ、一緒に花植えようか」と言いました。それが、「それ、いいすけえ。うちら、このために腰曲がっているすけ」という先ほどの話につながるわけです。

そうすると、先ほどまで自分に背を向けていたお母さんたちが同じように「花、植えようか」となつて、「何、植えるんだ？」「アサガオです」「アサガオすけ」「アサガオ、植えよう」「アサガオ、じゃあ、どうするか」「屋根までロープを張ろう」となつたら、お父さんたちが「おまえんとこのはしご持ってこい。あれ、いいぞ。届くぞ」「やろう」「やろうか」、するとお母さんたちがまた「いや、そんなまで伸びるわけないすけ」と言って話が急に展開し始めたので、「えー？」という感じになりました。

アサガオを植えるということだけで、先ほどまで気まずい沈黙の「分からないすけえ」だったものが、自分たちにやれることが見つかった瞬間に皆が動き始めたのです。「ロープを張ろう」「はしご持ってこい」「屋根にロープ張って傷つけると冬とき雨漏りするから大変だぞ」「何か当てようか」と皆が自分のやりたいこと、やれることで急に動き始めたのです。それが、まさに「明後日朝顔プロジェクト」が「分かんないすけ」で始まったところなのです。

宮島 いい話ですね。そのようなことです。結局は、人間性だと思うのです。アートのことを「分かんない」と言っても、人間が食べたり飲んだりするのは誰でもやることで、そのときに人間が何となく見えてくるわけです。それで共感してくれて、今のような「こいつの言っていることだつ



日比野氏

たら、まあ、手伝ってやろうか」というような話につながるのです。
質問者B 今日、「『戦争』の反対は『アート』だ」というお話を聞いて本当に感動しました。私も3年前にフランスに行ったときに1週間かけてパリの3大美術館で鑑賞することができました。やはりフランスの人たちは、本当に美術が生活の中に入っていることを感じました。日本でも大原美術館やポーラ美術館など様々なところにも行きました。やはり美術館に行くことによって心が動くのです。美術館に入る前と帰るときの自分とは何かが違う、心が動いたというか、感動したというか、そのような体験をしました。今日のお話を聴きながら、東京富士美術館さんは、やはり平和の原動力のようなものをおもちだし、それを世界に広げていただきたいと思います。

先日、神戸に行ったときに、神戸ファッション美術館に足を運びました。ちょうど東京富士美術館でドレス展(「絵画のドレス|ドレスの絵画」)をされたときに神戸ファッション美術館とのコラボがありました。今までにない形でした。美術館は、それぞれが独立していて、お互いの交流はありません。それを東京富士美術館さんが先駆的に交流をされました。美術館は、それぞれの芸術が自分の殻に閉じこもって独立しているのですが、その各美術館がそこからさらにお互いに連携したりしながら日本の芸術、また世界の芸術を交流させる起点になってもらえればと思いました。そのような意味で、この東京富士美術館さんには、平和のためにさらに貢献していける使命があらわれるのではないかと、今日参加させていただいて感じました。本当にありがとうございました。

以上です。

宮島 東京富士美術館が大好きなですね。かなり心が動いたようで感動いたしました。ありがとうございます。

現代の図工教育の問題点

質問者C 今、中学3年生と高校3年生の娘2人と家で勉強しています。東京富士美術館にはよく来て、毎回、とても感動しています。今回の「柿の木プロジェクト」にも関わらせていただいて、一人一人の子供たちの旗の絵にも、私も子供たちも本当に感動しました。

東京富士美術館の常設展示や今回の「旅路の風景」展を見て、「天才だな」などと思いながら子供たちと話し合っています。今回、先生方に初めてお会いしたのですが、一流アーティストは雲の上の人で、少し威張っているというか、「共感するところがないような人だったら嫌だな」などと思いながら、今日は話を伺わせていただきました。

宮島 よほど嫌われているんですね。

質問者C いいえ、やはり一流というと、つい、そのように感じてしまうのですが、現代アートの先生方が知らない人の中に浸透していくため

に頑張っているという話を伺って、人としてとても信頼できます。(会場から笑い)

さて、先ほどの受験生2人が一生懸命に5教科を勉強しているのですけれども、美術も同じように好きなのですが、学校の美術が本当にどうしようもなくつまらないようなのです。(会場から笑い)

今すぐどうこうということではないのですが、学長になられたということもありますし、アメリカのこともお話にありましたが、普通の子供たちが美術をもっと楽しく学べるよう、美術の先生たちにさらに頑張ってもらいたいと思っています。

宮島 ええ、そうですね。日比野さんは今、学長ですが、多分、次期文化庁長官になりますから(笑い)。

そのときはぜひ、美術の教育改革を……。

日比野 小学校・中学校・高校の美術の授業と、美大や芸大の美術の授業では、同じ美術教育でもかなり違います。僕も小学校の図工の時間が好きだったかという、そうでもなかったです。先ほどの違いの話ですが、お父さん、お母さんたちが子育てをしていると、それこそとても自由奔放な小学校1・2年で、3年生ぐらいになるとクラスの中できちんと集団行動ができるようになって自分を俯瞰して見られるようになるし、自分が他者からどのように見られているかを客観的に認識できるようになってくると、人とのズレを少し嫌がり、同じほうが集団の中にいやすくなるじゃないですか。

そのようになってくると、アートはやりにくくて、絵を描くときに隠すのです。小学校1年生ぐらいだと、別に人と違っていても気にしない。クラスに30人いて、先生の後ろに黒板があって、正解がここに出ると「みんな、できましたか。できた人?」「はい」「はい、全員正解」と褒められるのですが、図工の場合には、ここに正解があるわけではないから、30人が絵を描いていても何が正しいのかがよく分かりません。先生が回ってきて「宮島君、いいね、よくできているよ」と褒められると、「あ、いいんだ」と思います。

僕の小・中の図工のときの思い出は、後ろの人が褒められて「いいな。よし、俺に来るぞ」と思ったら素通りされたのです。「えーっ、駄目かな」と思ってしまいます。そうすると、何となく図工が分からなくなって「この先生、嫌い」というようになってしまうのです。

ですから、図工は、あるところまできたら、あまり同い年の子がいるところでやるのが、ふさわしくなくなってくるのでは?というのが僕の考え方です。算数などはドリルで、足し算のあとは引き算、そしてかけ算、わり算、分数と、同い年の子供たちが一緒になってレベルアップしていく教育が向いています。図工のように人との違いを魅力的に発揮していこうという授業においては、同い年の人がいると、「ズレが面白くない」とか「ズレるとよくない」となり、「ズレたほうがいいよ」という授業はやりにくいわけです。そうすると、多様な人たちがいる社会の中でやっていくことが、アートとしてはもっと必要なのではないかと、ということがあります。

今の美術や図工が、教科として時間割の中に他の学問と同じように入っているのは少し違うのではないかという考え方はあります。ですから、地域社会の中では年齢も職業も違うし、いろいろな人がいるなかで創造活動をしていく、ちょうど「柿の木プロジェクト」のようにいろいろな人が共同作業をしていくところにこそ、アートの魅力や面白さを感じられる現場、空間があるのではないかと思います。

質問者D 今日、山口県から来ました。実は藝大のOBで、非常勤で中学校や高等学校でずっと美術を教えていまして、今のお母様の話を聞きながら反省することもあるのですが、私は、生徒と一緒に描くのです。そして、生徒には、この美術の時間は、実は数学や国語や語学の、そして社会や様々な学問のベースになっているということを十数年間ずっと言い続けていて、こういう田舎の美術の非常勤講師がいることも覚えておいていただくとありがたいです。(会場から笑いと拍手)

日比野 まさにそうだと思います。「美しいな」と思うものは、算数や数学の中にもある。「この数式、美しいな」「この図形、ぴたつとはまって気持ちいい」というように。理科の観察の中にも美はあるし、文章の中にも創造する力の美はあります。すべての学問の中にアートはあるのです。

ですから、そのようなアートだけを取り出してやってしまうと、「アートは生活に関係ないよ」あるいは「アートって、自分たちの人生に関係なくて、それこそどこに行かないとアートはない」となってしまう。けれども、小学生のときからすべての学問の中に美を感じるシーン、場面がたくさんあることを初等教育で感じていると、アートに対して全然違う距離感の人間が育まれていくだろうと思います。いいと思います。

宮島 というわけで、そろそろ時間になりましたか。

司会 あっという間に1時間半が過ぎてしまいました。以上をもちまして「SDGs×時の蘇生・柿の木プロジェクト」植樹記念クロストークを終了いたします。大変ありがとうございました。